

「ゾウと子どもとカップ麺」

ボルネオ保全トラスト・ジャパン
理事 森井 真理子

ボルネオ保全トラスト・ジャパンは、緑の回廊、野生ゾウの保護施設、環境教育を3本柱として、2008年から活動しています。現在、りそなアジア・オセアニア財団から助成を頂き、「日本とマレーシアの子どもをつなぐ ICT を利用した対話型遠隔教育」をおこなっています。

◆ボルネオの森はアブラヤシ農園に換えられている



ボルネオは、日本から一番近い熱帯雨林です。活動地はサバ州北東部を流れるキナバタンガン川下流域、サバ州の中でも野生動物が多い地域です。



飛行機から見るとこのように全部緑ですが、手前側は全てアブラヤシのプランテーション(大規模農園)です。自然の森はほとんどなく、川べりに少し疎林が残っているだけです。

◆ボルネオゾウはアブラヤシ農園でお食事



コロナ前に、日本の動物園の人たちと一緒に、キナバタンガン川のエコツアーに出かけました。この時に30頭ぐらいのゾウの群れを見かけました。大人ゾウが10数頭、子ゾウも同じぐらいで、川をゆったりゆったり歩いていくのです。悠々とした姿を見ているとゾウの住処を侵してはいけないと感じました。

しかし、この奥は全部アブラヤシの農園なのです。このゾウたちは、昼間は川の中州のところで休み、夜になって出てきます。農園に入り込んだゾウの群れは、若いアブラヤシを倒して成長点を食べたり、樹皮を剥がしてしまったりします。しかも長い期間いるので、農園の経済的損害は非常に大きいのです。私たちよそ者はこれを見て感動しますが、地元の人たちから見ると、やはり全然違った視点で見えるのです。

◆ゾウとアブラヤシがある国・ない国

マレーシアとインドネシアは、ゾウとアブラヤシがある国で、日本はゾウもアブラヤシもない国です。同じアブラヤシ、熱帯雨林を見ても、全然感じ方が違います。

住む場所が違うと感じ方も違うから 頭の柔らかい子ども時代に相互理解を	
ゾウとアブラヤシがある国	ゾウもアブラヤシもない国
<p>アブラヤシは生産量第1位 需要も拡大傾向 食品、洗剤、バイオ燃料など 熱帯でしか生産できない パーム油産業は付加価値が大きく、 雇用も生む 基幹産業として重視</p> <p>熱帯雨林は資源（木材伐採、農園・ 産業植林への転換、経済的な利益を 得たい） 野生動物も大事（観光資源）</p>	<p>熱帯雨林は、温暖化防止 災害の甚大化防止 地球の肺</p> <p>野生動物 棲み処を追われ可哀そう 生物多様性の危機 陸の保全是SDG s 15</p> <p>パーム油は「見えない油」 消費しているのに、意識していない</p>

マレーシア、インドネシアにとっては、アブラヤシから取るパーム油は植物油生産量第一位で、世界人口がこれからも増えていくと、対応できる植物油は、単収がずば抜けて高いパーム油しかないだろうといわれています。パーム油は、食品以外にも洗剤、バイオ燃料など多様に使われています。生産国では、農園から加工まで一気通貫でできる付加価値が高い重要な基幹産業になっています。雇用創出に繋がり、アブラヤシを育てたことで子どもを学校に行かせることが出来ました。熱帯雨林も大切だと思っていますが、どちらかというと、木材、ゴムなどの産業植林により経済的な利益を生む土地利用をしたい考えのようです。もちろん、野生動物も大事だとも考えています。

一方、日本などのゾウもアブラヤシもない先進国にとっては、やはりどこか余所事のような感じです。熱帯雨林は気候変動や生物多様性の観点からも非常に大切に、侵してはならないという感覚を持つ一方で、パーム油はたくさん使っているのにそれをあまり意識していない、考えていないところがあります。

◆対話型環境教育の概要

大人になるとどうしても頭が硬くなり、概念的な思い込みから抜けられません。そこで、子どもたちが相手の国のことを思い、環境の違いを想像できるような、対話型の環境教育をしたと考えたのです。コロナによって当初予定より内容少し変わってしまいましたが、2022年5月から8月にかけて、3回連続のワークショップを行いました。

**ICTを利用した
マレーシアと日本の子どものための
対話型環境教育**

りそなアジア・オセアニア財団環境助成 2019~
連続ワークショップ「ゾウの救出大作戦」 2022年5月~8月

主催 BCTJ
共催 サバ州野生生物局（ロッカウイ野生動物公園） BCT
旭川市旭山動物園 豊橋総合動植物公園 鹿児島市平川動物公園
対象 小学4-6年 各園 10名

第1回 アブラヤシとボルネオゾウの暮らし
第2回 パーム油と私たちの暮らし
第3回 意見・ポスター発表
世界ゾウの日（8/12）各園で
全員のポスター展示

4つの動物園からの動物ライブ中継



日本の旭川市旭山動物園、豊橋総合動植物公園、鹿児島市平川動物公園、マレーシアのロッカウイ野生動物公園の四つの会場を結び、小学校4年生から6年生ぐらいの子どもたちが参加して行いました。

1回目はアブラヤシとボルネオゾウの暮らしを動物の視点から、2回目はアブラヤシから採るパーム油と私たちの暮らしを人間の視点から考えてもらい、3回目はゾウといかに共生してくかを皆で意見交換した後、ポスターを作成しました。作成したポスターは、世界ゾウの日に各園で展示しました。四つの動物園から、動物のライブ中継も行いました。

**Zoom: ボルネオと日本3つの動物園のライブ中継
コロナで出てきたいいいこと**

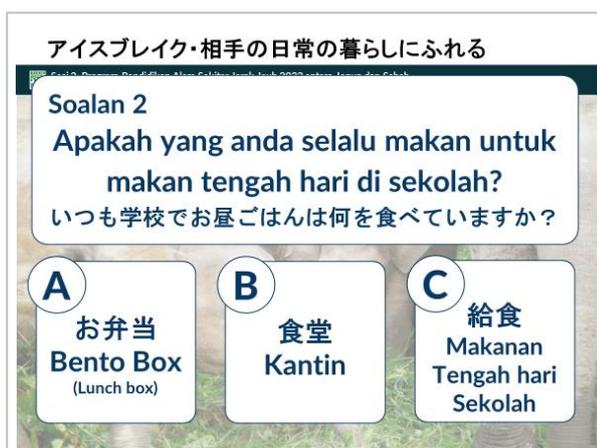



第3回ワークショップ 2022年5月21日

コロナになってから一番良かったと感じているのは、Zoomの活用です。子どもたちの表情が見えるので、質問して挙手で答えてもらおうと、どのようなことを考えているかなどがよく分かります。子どもたちもお互いの姿が見えるので楽しそうでした。直接会えないから苦肉の策としてZoomと捉えていた大人よりも、子どもの方が自然体で受け入れていました。

◆ワークショップ・アイスブレイクの工夫

ワークショップの初めに、お互いの子どもたちが打ち解けるためにアイスブレイクを行います。通常は体を動かしながらのゲームを参加者全員で行うのですが、Zoom なのでそうはいきません。朝起きる時間、朝ご飯の何を食べるか、好きな教科など、相手の日常の暮らしに関する質問にしました。日本語マレー語をそれぞれ通訳していると時間がかかって子どもが飽きてしまうので、同じ画面にマレー語と日本語を出し、答えを挙手で行う形にしました。



日本の子どもから「え、ボルネオって食堂があるの?」、マレーシアの子どもからは「給食って何?」というように、日常の暮らしでお互いに違うところ、同じところを意識することができたと思います。

◆同じ内容のテキストを作成



子どもたち同士で意見交換するとき、同じベースに立った方がいいので、ワークショップで使うテキストは、日本語版とマレー語版で作りました。まずは日本語版をつくり、英語に翻訳して、SWD(サバ州野生生物局)とBCTのスタッフとともに何

回か会議を行い、用語や表現などすり合わせました。この作業は、2020年から2021年に行いました。

テキストは A3 サイズに両面印刷したもの。表面は「アブラヤシとボルネオゾウの暮らし」、裏面は「パーム油と私たちの暮らし」です。切れ目をいれて、蛇腹折りにすると、A5 サイズ、8ページの豆本になります。子どもたちは、自分たちでハサミ入れて、折り曲げると、1枚の紙が豆本になる作業を楽しんでいたようでした。

◆孤児になったボルネオゾウを見て考える



ロカウイ・ワイルドライフパークからの中継を行い、孤児ゾウのジョーの様子などを観察しました。



ジョーという子ゾウは、2012年に見つかりました。群れの大人のゾウたちは、このような死んだ状態で見つかりました。消化管からの出血があったので毒殺ではないかと言われています。ジョーだけは、おっぱいしか飲んでいなかったので生き残りました。子どもたちは、このジョーを見ることによって、現実人間とのコンフリクトが起きていることを実感できたと思います。

◆ 自分たちが使っているパーム油について勉強する



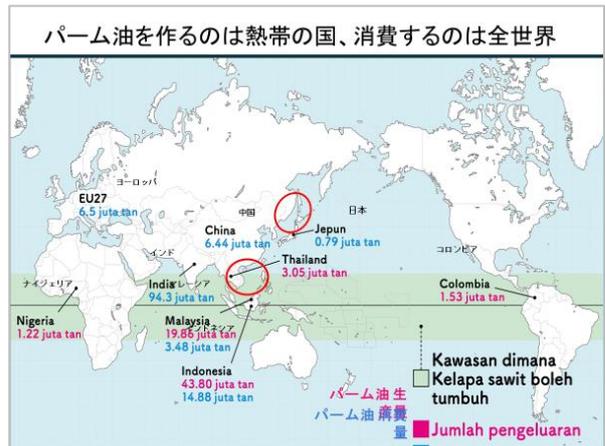
2 回目は、アブラヤシ、パーム油についての学習です。



まず子どもたちがパーム油というものをあまり知らないのです、この図を画面に出し、「ハンバーガーを食べたことのある人」、「フライドポテトを食べたことのある人」、「カップ麺を食べたことのある人」と訊ねました。日本、マレーシア双方の子どもがほとんど全員手を挙げました。「ハンバーガーやカップ麺食べない」と言う子どもでも、「では歯磨きペーストとかシャンプー、リンスとかはどうする？」と聞くと、「うっ」と詰まってしまう。

パーム油はこれだけ日常生活に入り込み、価格も非常に安いのです。東南アジアの収入の低い国でも植物油を使えるようになったのは、パーム油があるからです。パーム油を使わずにオリーブ油とかバターにするというのは、マリー・アントワネットが言ったとされる「パンがないならブリオッシュをお食べ」のようなものだよということを話します。

パーム油の生育域は、赤道近くの緑の帯のところです。インドネシアとマレーシアだけで全体の 85%を作っており、ヨーロッパや中国、その他いろいろな国で使われています。日本も年間 70 万トンぐらい使っています。これは日本が使う植物油



の 25%ぐらいで、菜種油に次ぐ多さです。1人あたりと年間 5 キログラムぐらい使っているという現実を知ってもらいます。

実際に問題が起きているのはマレーシアやインドネシアですが、その原因となるアブラヤシを消費しているのは日本の私たちです。私たちには消費者としての責任があるということ、日本の子どもたちに分かってほしいと思いでいます。

ただ、マレーシアの子どもに、マレーシアではどのぐらい作っているかを聞くと、「ナンバー2」と言っても盛り上がりたり、「日本はほかと比べて結構少ないじゃん」という感じで、あまり伝わらなかった気もします。日本の子どもに関しては、消費者としても使い続けるし、将来企業へ就職あるいは行政で働くとき、原料調達へどう向き合うかが出てくるので絶対分かってほしかったのですが、少し伝え方を考えようと思っています。



アブラヤシからパーム油を作るまでを示した図です。これは、機械化されていません。右上にある果房は 30 キログラムぐらいあり、しかもとても高所に生るので、長い鎌で 1 個ずつ切り落としてトラックに積みます。搾油は 24 時間以内にしないと品質が劣化するといわれています。非常に労働集約型の農業で、決して楽なものではないことを子どもたちに伝えました。

ワークショップの発言やポスターから見えてきたことです。「ゾウが学校に入ってきたらどうする？」と、実際にゾウが入ってきた画像を見せて聞くと、マレーシアの子どもからは「野生生物局に連絡して何とかしてもらおう」という答えが返ってきましたが、日本の子どもたちは目が点になってしまい、「うっ」と詰まってしまう。やはり、置かれた環境によって肌感覚として分かることが全然違うので、その辺りを共有するために、海外の国の人と共通体験を持ってほしいと思いました。

マレーシアの子どもたちは、私たちのゾウを守ろうという、「私たちの」という言葉がつくのです。ここは日本の子どもには見られないもので、やはりそこにいる動物に対する愛着というのは本当に環境に左右されるのだなと思いました。



「世界ゾウの日」に、各園で全作品を展示しました。翻訳もつけたので、大人の人たちが立ち止まって見たり、これを描いた子どもたちは親御さんを連れてきて、「ここにあるよ」と言って自慢していて、表現の方法としてはとても良かったなと思っています。

◆ 今後の課題

ICTを利用した
マレーシアと日本の子どもたちの対話型環境教育
目標と今後の課題

知る
熱帯雨林、アブラヤシ農園、野生動物の現状を知る
盛り込みすぎて消化不良だった→コンパクトにまとめる

つながる
生産国、消費国の子どもがICTで直接つながる
子どもたちは使いこなしている→より効果的な使用法

いっしょに行動する
同じ地球にすむ仲間として「目に見える」活動をする
TikTok「僕はちくわです」・・・豊橋の子どもから、他の国の子どもへ伝える

まとめです。今後とも環境の違う子どもたちをつないでのICT教育は続けていきたいのです。私たちが大切だと思っていることは、まず、「知る」ことです。熱帯雨林とかアブラヤシ農園とか野生動物の現状を知るということを、まず子どもたちに教えたいと思います。

それから、生産国と消費国の子どもが、ICTで直接つながることは非常にいいことで、効果的です。ただ、子どもたちは使いこなしていましたが、大人がICTの利点を生かし切れていない、使えこなせていないと思いました。これは反省点です。

最後に、「一緒に行動する」ことで、同じ地球に住む仲間として「目に見える」活動をしていこうということです。今回はポスターでしたが、豊橋の子どもたちがTikTokで「僕はちくわです」という小さなパフォーマンスをしていたら、向こうの子どもたちもすぐやり始めました。大人が全然関与しないところで、一緒にやり始めたのです。今回は簡単なパフォーマンスでしたが、子どもから子どもへ、メッセージが伝えられるような場にできればいいなと思います。ご清聴ありがとうございました。

(終了)